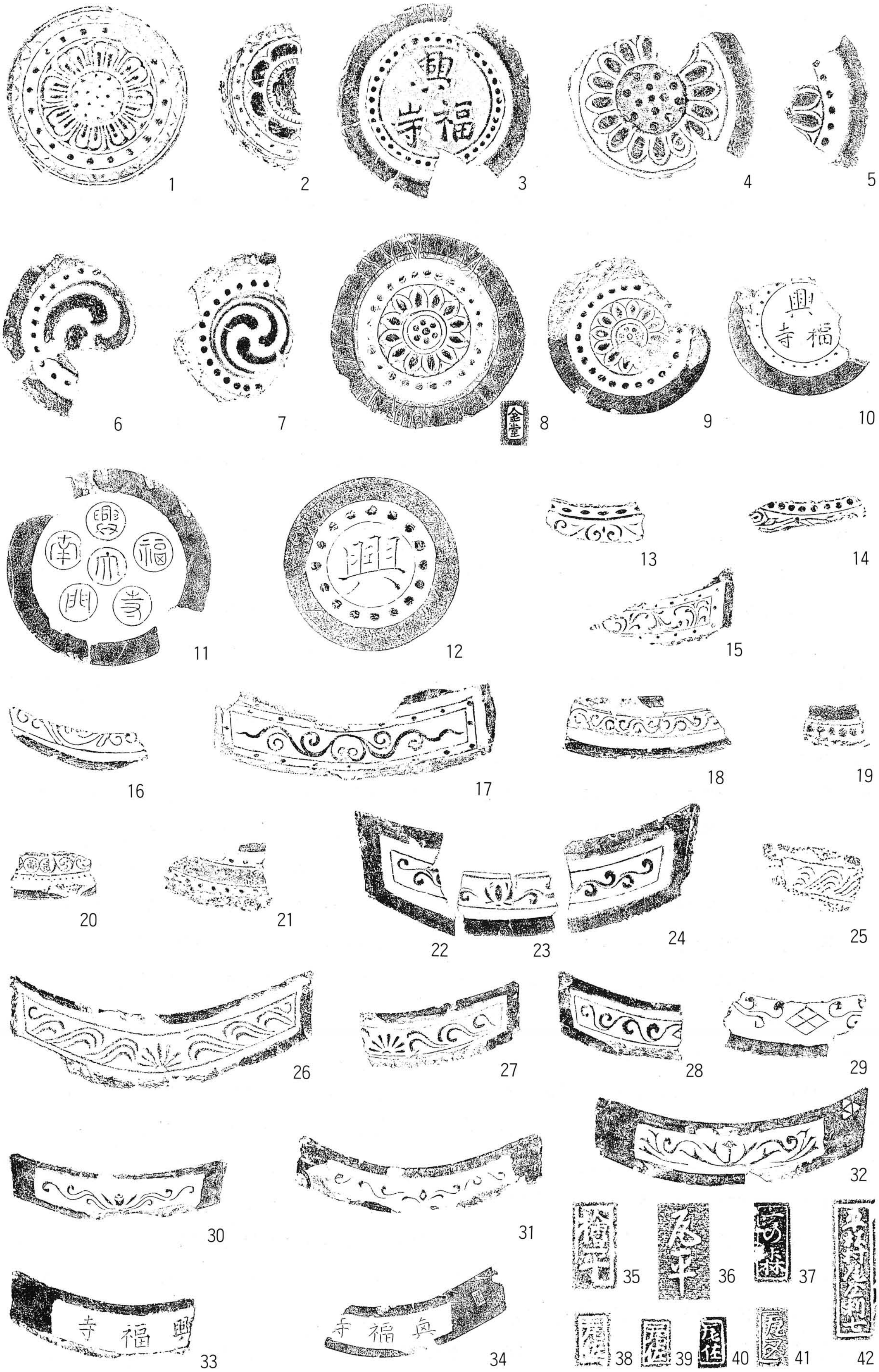
5　遺　　物

5－1　瓦（第32図）

今回の発掘調査では合計34567点の瓦が出土した。その内訳は軒丸瓦177点、軒平瓦300点、丸瓦9101点、平瓦24966点、鬼瓦７点、熨斗瓦16点、その他道具瓦32点である。出土した瓦の所属時期は、興福寺創建の奈良時代初頭から近代にまで至る。軒瓦でその割合をみると、奈良時代27点、平安時代43点、中世231点、近世160点、不明16点であり、奈良時代の瓦の出土数はきわめて少ない。

軒丸瓦　第32図-１は奈良時代初頭の興福寺創建期に位置づけられる、線鋸歯文縁複弁蓮華文の6301Ａ型式である。今回の調査で6301型式は14点出土し、そのうちＡ型式と判断できた資料は８点ある。２は平安時代に位置づけられる単弁９弁蓮華文軒丸瓦である。３は鎌倉時代後半の文字瓦（「興福寺」）であり、外区に38の珠文を配す。４・５と共に基壇東側の土坑SK8064から多量に出土した。４は単弁12弁の軒丸瓦で蓮子数は１＋４＋８である。５は４と近似するが、外区に珠文を配する。いずれも鎌倉時代末の資料である。出土状態、焼成、胎土などから、３は軒平瓦20と、４・５は軒平瓦22 ～ 24に組む可能性が高い。６・７は中世の左巻三巴文軒丸瓦である。６は外区に小型の珠文を配するが、圏線は認められない。巴頭は尖り、頭同士も比較的近接する。７は比較的大型の珠文、内圏線という文様構成を持ち、巴頭は丸みを帯びている。６に比べ７は後出の資料であろう。８と９は近世の単弁12弁蓮華文軒丸瓦である。８は外区に２５の珠文、内区に１＋６の蓮子を配し、丸瓦部凸面には「金堂」の刻印が認められる。９は瓦当面の文様構成は８に近似するが、焼成は良好でやや小型である。９は文政二(1819)年の中金堂再建に伴う資料と推定される。10は「興福寺」、11は「興福寺南大門」、12は大型の「興」一文字の文字瓦である。いずれも焼成は良好で、近世末以降の資料と考えられる。『興福寺菩提院大御堂復興工事報告書』では、11を幕末に企図された南大門再建用の瓦と推定している。

軒平瓦　13・14は興福寺創建期の軒平瓦である。13は均整唐草文の6671A型式で、遺存部分の上外区に杏仁形の珠文が観察される。本調査では３点が出土した。14は変形忍冬唐草文6645A型式で、LH26区瓦溜から２点出土した。15は6739A型式の均整唐草文軒平瓦で、所属時期は平城宮瓦編年Ⅳ期後半である。16・17は平安時代後半の均整唐草文の軒平瓦である。17は大型資料で、上下左右の外区には珠文を配する。同笵の資料が合計４点出土しているが、いずれも調整は粗い。18～21は鎌倉時代の軒平瓦である。18は均整唐草文軒平瓦である。顎部には凹型台圧痕があり、瓦当裏面にタテケズリが観察されることから13世紀の資料と推定した。19は連珠文軒平瓦である。20は均整唐草文軒瓦で、瓦当中心に逆字体「興福寺」が配される。SK8064を中心に多く出土した。18と同様の製作技術上の特徴が認められ、13世紀に位置づけた。軒丸瓦３と組む可能性が高い。21は正字体「興福寺」文字瓦であり、外区に珠文を配する。22～24は大型の蓮華唐草文軒平瓦であり、鎌倉時代末に位置づけられる。軒丸瓦４～６に組む可能性が高い。25～29は室町時代の軒平瓦である。25～27は波状文の、28・29は唐草文の軒平瓦であり、中心飾りは26・27は半裁菊花、28・29は菱形である。26は東金堂に同笵例がある。30・31は宝珠均整唐草文の、32は橘均整唐草文の軒平瓦である。前者は近世初頭に、後者は17世紀末に位置づけられる。33・34は近世末以降の文字瓦である。いずれも「興福寺」の文字を配し、後者には「瓦佐」の刻印も観察される。近世末以降の資料には、「瓦佐」(38～40)以外にも「檜平」(35)、「瓦平」(36)、「一の森」(37)、「瓦又」(41)、「平松村瓦屋利七」(42)と刻印された資料が多くある。なお近世末以降の瓦は、安村健氏と藪中五百樹氏からのご教示を得た。



第32図　出土瓦（1～34　1：6，35～42　1：2）

5—2　土器・陶磁器

調査区からは、整理用コンテナにして31箱分が出土した。時代的には古墳時代（5世紀後半）の須恵器杯Hを最古として、奈良時代から近・現代に至るあらゆる時代の土器・陶磁器がある。その中でも、近世や近・現代の陶磁器類が出土量の大半を占めているが、ここでは主に中金堂の創建やその後の再建と係る遺構や堆積土層から出土した奈良・平安時代の土器についてふれる。

奈良時代の土器　出土量は極めて少量でかつ小片が多い。なかには図化をためらわれるものもあるが、共伴土器の中に確実に平安時代に降る資料は含まれていないことから、中金堂創建の時期や基壇周辺の整備時期を示す資料として重要である（第33図）。土師器には、杯A、杯B蓋、皿A（23）、皿C（21・22）、椀A（20）、盤、甕がある。皿Cはいずれも灯火器として使用された油煙の痕跡を口縁部に残している。須恵器には杯A（25）、杯B（26）・同蓋、高杯、壺、壺E（24）、小型平瓶、甕、甕C（27）などがある。20・23は須弥壇積土、21・24・26は南面五間階段積土、25は単廊時東階段積土、22は基壇南面外周バラス敷、27は創建期基壇の南面地覆石抜取跡から出土したものである。また、基壇土積土、廂柱間の地覆石据付穴、創建時足場穴、南面中央階段斜前方にある土器据付け穴SX8016からも、各々奈良時代の須恵器が出土した。SX8016に埋められていた須恵器甕は現存高27cmで、旧地表面と同じ高さになるが、本来の最大径（現存最大径56cm）まで至っていない。もともと最大径80cmを越える須恵器大甕の上半部を打欠いて底部近くのみを利用したものであろう。

平安時代の土器　SA7958の間柱の各柱抜取跡のうち、SX7965とSX7962の柱抜取跡からの出土土器は、比較的まとまった様相を示している。SX7965柱抜取跡出土土器は土師器の皿類のみである。これらの土師器は火災による火熱は受けておらず、灯火器として使用された油煙の痕跡を口縁部に残すものが多い。法量からは大・中・小の区分も可能であるが、ここでは製作手法や形態から三類に分けた。A類皿は、やや丸みをおびた底部と外上方にひらく口縁部からなり、器壁を厚く作る。底部外面に指押えの痕跡、内底面に刷毛による調整痕、口縁部外面には強い二段ナデの痕跡が明瞭に残る。法量から大・小に区分され皿AI(16)は、口径15.8cm、器高2.9cm。皿AII（4）は口径12.2～12.7cm、器高1.8～2.5cm。このほかに、断面三角形の高台をつけた皿(3)がある。B類皿は平底状の底部と外方にのびる口縁部からなり、A類に比してやや深い器形となる。内底面の刷毛調整痕はなく、口縁部外面の二段ナデの痕跡も不明瞭である。大・小に区分され、皿BI(2)は口径16.3cm、器高3.5cm。皿BII(5)は、口径10.2～10.7cm、器高1.9cm～2.3cmあり、先の皿AIIよりさらに口径が小さくなっている。C類皿は、口縁部が屈曲し、口縁部を肥厚させたいわゆる「ての字状口縁」の小皿である。口径10cm前後で器壁が0.5cm前後の一群(6)と、口径が11.2cmで器壁が0.3cm前後の一群(7)があり、後者は時期的にやや先行するものであろう。SX7962柱抜取跡出土土器には、瓦器椀・小椀、土師器皿がある。瓦器椀には器壁が厚く内面のミガキの密なるものと、器壁が薄くミガキの粗いものがあることから、少なくとも11世紀から12世紀代の複数の型式が混在しているようである。瓦器小椀（12）は、口縁部内外面に粗いミガキ・内底面にらせん暗文を施したもので、高台の断面形は三角形となる。土師器は全て皿であり、製作手法は基本的に先のB類と共通する。皿BI(8)は、口縁部に二段ナデを施し、口縁端部を上方につまみあげる。口径14.2cm、器高2.7cm。皿BIIは、いずれも口縁部に二段ナデを施したもので、底部が丸底状になるもの(8)と平底のも(9)がある。口径9.9～10.4cm、器高1.4～2.0cm。このほかに皿AII類（11）が1点ある。口径12.4cm、器高1.9cm。

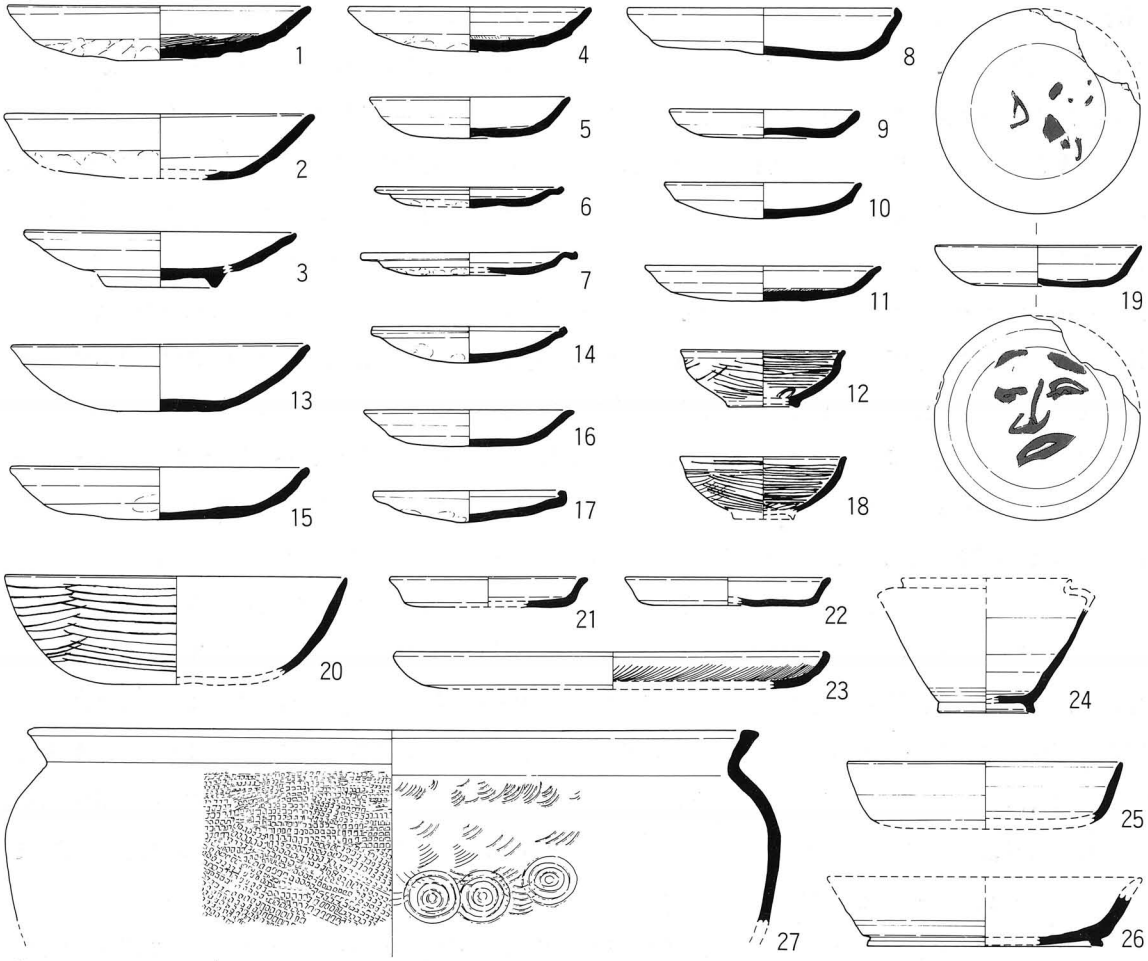
SA7958の他の柱抜取跡のうち、SX7960柱抜取跡からは瓦器小椀（18）、SX7963柱抜取跡からは土師器皿(13・14)、SX7966柱抜取跡からは瓦器小椀・土師皿が出土した。SX7960出土の瓦器小椀は、

内底面にジグザク状、口縁部の内外面に密なミガキを施したもので、先のＳＸ7962柱抜取跡出土小椀と比較して、型式的に先行するものである。

以上のように、ＳＡ7958間柱抜取出土土器は、基本的には灯火器に使用された土師器皿が主体となりながらも、その型式は単一ではない。これまでに知られている南都出土土器の年代観からすると、ＳＸ7965柱抜取跡出土の土器は11世紀中頃、ＳＸ7962柱抜取跡出土土器は11世紀中頃の土器を含みながらもそのほとんどの土器は12世紀後半と考えられる。これらの年代をあえて興福寺の被災の歴史と関連させるとすると、前者は永承元（1046）年ないし、康平３（1060）年の火災及び再建、後者は治承４（1180）年の火災及びその再建時期と関連するものであろう。ほかの柱抜取跡出土土器にも明らかに新旧二時期の土器が混在しており、間柱の使用法を考えるうえでも興味深い資料である。

土坑ＳＫ8062からは一括投棄された状態で土師器の皿が出土した。大小二種あり、大皿（15）は口縁部外面を強く二段ナデにし、口縁端部は丸く納めている。小皿には、端部を丸く納めるもの（16）、やや尖り気味に納めるもの、「ての字状口縁」のもの、内側に折り曲げるもの（17）といったように種々の形態が認められる。調整手法、口縁部の形態、法量等の点から、これらの土器の年代は先述のＳＸ7965柱抜取跡出土の土器に近い時期と考えられる。

そのほかの注目すべきものとして、二彩壺片、灰釉椀・壺片、白磁片や底部の内外面に人面を墨書した鎌倉時代の土師器皿（19）などがある。



第33図　出土土器（１：４，27　１：６）

5－3　金属製品・石製品・ガラス製品その他

今回の調査では、中金堂の創建以前から現在までの多種多様な遺物が出土した。ここでは、特徴的な遺構との関係でこれらの遺物の一部を紹介する。

(1)創建鎮壇具に関わる遺物　(巻頭図版参照)

中金堂の創建鎮壇具は、明治７・８年および17年に発見され、現在東京国立博物館(以下東博)および興福寺に所蔵されている。前述のように、須弥壇東半で検出した土坑ＳＫ8115が、鎮壇具発見に関わる遺構であると考えられたため、埋土を研究所に持ち帰り、水洗選別と微細遺物の検出をおこなうこととした。持ち帰った土量は、遺物収納用コンテナ約120箱におよぶ。ＳＫ8115埋土およびその周辺から出土した遺物には、明治期のものも含まれるが、従来から知られていた遺品との一致等から鎮壇具の一部とみられるものには、金延金、砂金、コハク玉、水晶玉、ガラス玉、和同開珎、銅椀片などがある。

金延金は２点あり、ともに幅7.6㎝前後の薄板を巻きたたんだもので、厚さと重さはそれぞれ0.12～0.17㎜、35.62ｇと、0.08～0.10㎜、34.02ｇ(第34図上･下)。東博所蔵の金延金９点は、いずれも帯金状に平らに延ばされたものであるが、幅が7.4～8.0㎝の間にあること、重さ35ｇのものが２点あることなど、今回出土したものとの類似点がある。これらも本来は巻きたたまれていた可能性を考慮する必要があろう。なお、同様に巻きこんだ金延金が豊浦寺金堂跡で出土している(『奈良県遺跡調査概報1994年度』)。飛鳥寺塔跡では、小さく折りたたんでおり、延金の埋納に二つの様式を知ることができる。砂金は６点を確認しているが、いずれも１㎝以下の不定形なもので、重さ0.03～1.09ｇ。コハク玉・水晶玉は、ともに径7.5～8.5㎜ほどの念珠玉である。ガラス玉には、緑色の小玉がある。

南階段のＶ期の積み土の中からも、鎮壇具の一部とみられるガラス玉、和同開珎が出土している。発見時の廃土が利用されたものであろう。ガラス玉は、平玉と呼ばれる碁石形のもので径14㎜、厚さ６㎜で緑色を呈する。同様の平玉は、東博所蔵の鎮壇具中に800点以上あり、濃緑・緑・緑黄・黄・黄褐・褐・濃褐色等の多彩なものが知られている。

第34図　ＳＫ8115および周辺出土金延金と砂金

第35図　ＳＫ8125水晶玉出土状況

また、こうした鎮壇具が再埋納された可能性のある遺構が２箇所で見つかっている。ＳＸ8120の掘形上層からは、真珠163点、水晶玉91点が出土した。水晶玉の内訳は、碁石状の平玉87点、丸玉３点、念珠玉１点である。

須弥壇南西隅のＳＫ8125からは、丸玉２点、平玉１点、辻玉１点、念珠玉１点が出土した(第35図)。丸玉は、径29㎜のものと24㎜のもの。辻玉は、径21㎜厚さ９㎜の円盤形を呈し、円の中央に１孔と側面から十字に孔をうがつ。

(2)土坑ＳＫ8064出土遺物(第36図)

基壇東側の北面回廊北部からは、焼け焦げた部材とともに、銅製飾金具、鉄製金具が出土した。銅製飾金具は、火熱を受けたためか、あるいは倒壊等による力のためか大きくひずんでいる。一辺17㎝のものと一辺15㎝のものの二種があり、ともに正方形を呈する。厚さ２㎜の銅板を切り透かし、円を中心に前者は上下左右に、後者は放射状に花文を配する。これらは、銹着した鉄釘のありかたから、金具自体に釘穴をもうけるのではなく、隅にある透かし部分を利用して部材に留められていたことがわかる。

鉄製金具には、座金具状のもの、半球形のものなどがある。

(3)壁ＳＡ7958出土遺物(第37図)

須弥壇の背後を囲む壁ＳＡ7958の間柱柱穴は、柱痕跡の周囲が火熱により赤化し、その中には多量の焼壁土、焼土、炭、および凝灰岩切石などが捨て込まれていた。これらに混じって複数の釘が出土した。穴により、釘の形式にまとまりがあること、また長さの異なるものが１本ずつセットをなしている場合のあること(第37図)など興味深い出土状況がみられる。

ＳＸ7961からは、基部断面が方形の切釘、折釘、方頭釘が出土した。これに対して、ＳＸ7963、ＳＸ7965、ＳＸ7966からは、巻頭で基部断面が長方形で扁平なものが出土している。巻頭の頂部は杏仁形を呈する。第37図上は、このうち最大のもので、長さ38㎝、基部上端の幅2.3㎝、厚さ1.3㎝、巻頭の横幅4.5㎝、重さ478.3ｇをはかる長大なものである。

第36図　ＳＫ8064出土銅製飾金具

第37図　ＳＡ7958出土鉄釘